

*The Great Gatsby*における自動車事故

赤 松 恵 子

(平成20年3月31日受理 最終原稿平成20年5月20日受理)

要旨

ギャツビー自慢の「黄色のロールスロイス」が、マンハッタンのホテルでギャツビーがデイジーのことでトムと対決した後の帰路に、トムの愛人マートルを轢き殺して逃走する。その車を往路では、トムが運転してマートルのガソリンスタンドに立ち寄っていた。当初だれが運転していたか不明であるが、その夜遅くギャツビーがニックに対してデイジーが運転していたと語ることで犯人がわかる。この事故に関するギャツビーの説明によると、デイジーが飛び出した女性がだれかわかって、故意に殺した疑いが生じる。対向車の方にハンドルを適切に切っていたら、避けられる事故でなかったかということである。この小説の新しさは、女性ドライバーの起こす事故にしたことである。1920年代に急増した女性ドライバーに対して、有力雑誌は1924年に「女性ドライバー問題」の特集を出した。この女性ドライバーに批判的な風潮が妻も運転する作家に影響を与えた可能性がある。また事故後の警察の捜査がギャツビーに及ばなかったことは、彼の属する暗黒街との癒着を示すものである。この暴露もこの小説のもう一つの特異な点である。

キーワード： 女性ドライバー、自動車事故、暗黒街、フォード社、1920年代

アメリカで自動車の本格的な生産が始まったのは、ちょうど100年前の1908年である。この年大衆向けの自動車として生産されたのは、ヘンリー フォード (Henry Ford) によるModel Tという角型の自動車で、1927年まで同じ型で色も黒を守り、モデルチェンジは行なわなかった。その間価格は下がり、1908年には一台850ドルで登場したのが、1913年には流れ作業の組み立てによる大量生産で年間20万台以上を550ドルで販売し、さらに8時間労働2交代制により、1920年代に300ドルまで下がり、大衆車としてサラリーマンが購入できる価格になった。1908年当時他の車は、2000-3000ドルもしたため富裕層のものであったが、ヘンリー フォードは自動車の普及に多大な貢献をした人物である。その意味で1920年代はだれもが自動車を持つ時代になり、今日のようにアメリカ国民の大部分が、車を運転するという時代が到来したのが、80年前のこの時代であると言える。1919-1930年の間に車の台数は600%の増加をした。¹ しかしだれもが車を持つことになれば、当然それは単なる便利な乗物というだけでなく、階級差を示すシンボルとなり、20年近くモデルチェンジをしなかったモデルTの生産が27年に終わったのも、多様化するユーザの要求に対応するのに、フォード社が遅れたためであった。

このように1920年代に普及して、だれもの車が持てる時代になると、社会生活にも大きな変化を起こすが、それはまた自動車事故の増大も引き起こすことになり、深刻な社会問題として取り上げられるようになった。今の車に比べると、開発途上でブレーキは効きにくく、運転技術も未熟な人が多かった。そのために1920年代の小説に自動車事故が、取り上げられるようになった。本稿で取り上げる『グレート・ギャツビー』(The Great Gatsby)は1925年4月に出版されているが、作者F. スコット・フィッツジェラルド (F. Scott Fitzgerald) (1896-1940) は、妻ゼルダ(Zelda)ともども運転した。「ジャズ エイジ」(Jazz Age)と1920年代を命名したフィッツジェラルドは、その旗手であることを自認して、車を運転して、パーティ好きの妻と共に遊びまわり、車にも精通していたと思われる。そのために自動車事故を起こす状況を、ドライバーの心理や資質を含め取り上げたのが、『グレート・ギャツビー』の新鮮さである。

1 女性ドライバーについて

1920年代アメリカに起きた大きな変化は、1919年の禁酒法 (the Prohibition)、1920年の参政権 (suffrage) が女性に認められたことである。この二つは1920年代に多大な変化を起こした。特に女性参政権は、男女同権の自覚を女性に促し、女性の社会進出も盛んになった。社会で活躍するには、自動車の運転は必須であるため、女性のドライバーも増えた。この女性が自動車を運転するようになった1920年代、それまで女性の行動を縛っていた数々の鎖が解かれたのも同然であって、服装にも大きな変化が訪れた。それまではアメリカ女性は、19世紀のままの長いスカートに長い髪を結い上げ、良家の娘は単独で外出することはなく、シャペロンという付添い人を同伴するのが普通であった。女性は男性の所有物であるので、自由に単独で外出するのは望ましくないと、少なくとも上流階級では信じられていた。しかし下層階級の働く女性は、無論単独で外出していた。このような階級によって異なる行動規範を、一挙に無くしたのが1920年代であった。アメリカ女性は、選挙権よりも行動の自由、もっと言えば性的な解放を望み、それを享受したい人にとって自動車は、必須のアイテムであった。このような時代の先端を行く無軌道な若い女性を 'flapper' 「お転婆」と呼んだが、flapとは「羽ばたく」という意味で、飛び立ちそうな鳥に喩えたものである。このようなフラッパーを登場させたのが、フィッツジェラルドの作品であり、『グレート・ギャツビー』では女性ドライバーが登場し、轢き逃げ事故を起こす。自動車事故は、今日も深刻な問題であるが、アメリカで社会問題となったのは、自動車が普及した1920年以降である。その意味で1925年に出たアメリカ小説の傑作が、自動車事故を扱ったのも、当時の新しい社会問題であったからだ。

アメリカで女性ドライバーの数が急増したのは、1920年代後半で、1927年の雑誌『モータ』Motorで、「女性が毎回車の運転を習い—その数は年間何千人にもなり、昨日までの秩序にとって脅威となっている」とレイ W. シャーマン (Ray W. Sherman) が述べている。² 日米共に女性ドライバーは現在非常に多く、珍しい存在ではないが、職業運転手となるとやはり少ない。タクシー、バス、トラックでもその数は少なく、男性の職場という慣行が支配しているのは、女性は体力的に激務が適さない、女性は感情的になりやすい、事故などの対応能力が男性より

劣るなど、女性に対する偏見に近いものが根拠となっている。そのような女性蔑視は、1920年代のアメリカで、女性に参政権が与えられた後も、男性作家によって描かれる女性ドライバー像に読み取れる。『グレート・ギャツビー』を取り上げ、女性ドライバーに焦点を絞り、この作品の特異性を検討する。

作品に入る前に、1920年代の女性ドライバーにどのような見方が多かったかを、検討することにする。デボラ クラーク (Deborah Clarke) の『ドライビング ウーマン』(*Driving Women*)によると、1904年ごろにすでに女性ドライバーに対する批判が、ドライバー向けの雑誌に出たが、一般に女性ドライバーが事故と結びつけて問題視されるようになったのは、1924年4月ということになる。

Resistance to women's access to the car, of course, gave rise to the myth of the incompetent female driver. A 1904 article in *Outing Magazine*, "Why Women Are, or Are Not, Good Chauffeuses," warned that women's temperament and lack of concentration inhibit their driving skills, though the article grudgingly admits that some women are able to overcome these shortcomings and become decent drivers. Many others were less encouraging; an anonymous writer in the April 5, 1924, *Literary Digest* grumbled, "Some day a man with a head for statistics is going to show us just how many deaths and disablements women drivers were responsible for, and just how much more, or less, dangerous they are at the wheels of motorcars than are their brothers of the road" (qtd. in Bonseal 23).³

このような女性ドライバーを悲惨な事故の元凶のように扱う記事が、『リテラリー ダイジェスト』(*Literary Digest*)⁴ のような有力総合雑誌に出れば、当然自動車会社側は反論する。その反論は女性の運転能力は男性にくらべて勝ることはなくても、劣っていないとするものであった。

A study by the American Automobile Association cited in *Literary Digest* in 1925 asserted that women drivers have proved "as competent, if not more so, as men" (24).

(Clarke 14)

自動車の大衆化を狙っていたフォード社は、1912年にすでに女性向けのパンフレット 'Women and Ford' を作成し、いかに女性にとって自動車がよいものかを宣伝し始めた。

The Ford Motor Company extolled the car as providing an ideal opportunity for women: "It's a woman's day.... She shares the responsibilities—and demands the opportunities and pleasure of the new order. No longer a 'shut in,' she reaches for an ever wider sphere of action — that she may be more the woman. And in this happy change the automobile is playing no small part". (Clarke 15)

女性の時代の到来で、もはや家庭に「閉じこもる」ことなく責任と喜びを男性と共に共有するのに、いかに自動車は女性に役立つものかを強調する実利主義で、売り込みを図った。自動車の普及と共に女性ドライバーに対する反対論が出るのは、やはり女性が単独行動する機会が増え、外を自由に動き回れば、男性にとって心配だという理由が本音だと思うが、独身のキャリアウーマンならば、その心配はないので、フォード社は1924年までビジネスウーマンに的を絞って自動車販売を始めた。このように「フォード社は女性を解放し、それをセメントで固めた。」⁵

2 『グレート・ギャツビー』における女性ドライバー

1920年代の旗手を自認するF. スコット・フィッツジェラルド夫妻にとって、男女が共に車を運転することは、自然なことであった。妻ゼルダがハンドルを握っている写真も存在する。しかし1930年以降統合失調症で精神病院に入院したゼルダの運転に、危険を感じたことがあったかも知れないが、交通事故を起こし、被害者が出たという記録はない。1924年の夏『グレート・ギャツビー』執筆中に、ゼルダがフランス海軍の飛行士エドワード ジョーザン (Edouard Jozan) と恋に落ち、スコットはトム ブキャナン (Tom Buchanan) の立場に置かれ、二人を別れさせて解決したかに見えたが、その後も夫妻に危機は続く。そのために執筆に集中できずに、夫妻でパーティに明け暮れる生活が続き、南フランスのリビエラで文化人サロンを開いていたアメリカ人資産家のマーフィー夫妻 (Mr. & Mrs. Murphy) や、ヘミングウェイ (Hemingway) と親交を結んだ。アンドリュー ターンブル (Andrew Turnbull) ⁶によれば、フィッツジェラルド夫妻はパーティの帰路、酔って市電の陸橋の上で駐車したまま寝入り、始発が出るまえに農民に発見され、事なきをえる事故を、南フランス滞在中に起している。しかしこれは『グレート・ギャツビー』が出た後の話である。

女性ドライバーは危険だ、運転が粗いとする観点は、フィッツジェラルドも感じていたと思われる。1924年4月5日号の『リテラリー ダイジェスト』の記事を読んだかどうかは、同年4月にリビエラに向け渡航しているのでわからないが、何らかの影響はあったかも知れない。さらにフォード社はキャリアウーマンに車を売り込んだが、『グレート・ギャツビー』で独身のキャリアウーマンに該当するドライバーは、プロゴルファーのジョーダン ベーカー (Jordan Baker) である。この女性は脇役であるが、語り手のニック キャラウェイ (Nick Carraway) と共に、ギャツビー (Gatsby) とデイジー (Daisy) の再会を、ギャツビーの依頼で回り、デイジー側の「語り手」の役割を演じている。この二人の語り手によって、5年前のギャツビーとデイジーの話が語られることになる。ジョーダンの運転はひどいものだと、ニックが酷評する。ジョーダンとニックがドライブしたとき、彼女が道路工事の男の上着のボタンを飛ばすほど、危険な運転したのに驚き、彼女の運転を次のように批判する。

"You're a rotten driver," I protested. "Either you ought to be more careful or you oughtn't to drive at all."

“I am careful.”

“No, you’re not.”

“Well, other people are,” she said lightly.

“What’s that got to do with it?”

“They’ll keep out of my way,” she insisted. “It takes two to make an accident.”

“Suppose you met somebody just as careless as yourself.”

“I hope I never will,” she answered. “I hate careless people. That’s why I like you.” (48)

ジョーダンの運転が不注意だと、ニックが非難すると、二人不注意な人間がそろわないと事故は起きないと、彼女は反論する。彼女は相手が避けてくれることを期待すると言う。これは「甘え」のように聞こえるが、実際に女性の運転だとわかると、大抵の男性ドライバーは、道を譲っていたのではないかと思う。レディーファーストとして。そういう意味で、1920年代当時女性ドライバーは、まだ特別な存在であり、男性にとって避けたい存在でもあった。このジョーダンについては、プロゴルファーとして、不利な所に落ちた玉を、人目の少ない時に、移動させた嫌疑をかけられたが、証人のキャディーが前言を翻したために、助かったという問題の人物でもある。おそらく金が背後で動いた結果であると思われる。これはジョーダンについて車の運転が「不注意」である以上の人格の信用に関する深刻な問題である。ニックは中西部の出身で道徳的な問題に敏感な人物で、ギャツビーがガソリンスタンドの店主ウイルソン (Wilson) に射殺された後、夫婦共謀を感じたブキャナン夫妻を「不注意な人々」として赦し、深くその罪を追求しないで、腐敗した東部を去り、田舎に戻る事から見ても、ニックの使う「不注意」は、婉曲な言い方で「不道徳」に近い意味である。女性のプロゴルファーという時代の先端に行く職業の「新しい女性」に道徳面の問題を挙げることは、1920年代を代表するキャリアウーマン全体に対する不信感を示すものでもある。フィッツジェラルドは、『グレート・ギャツビー』執筆当時、「ジャズ エイジ」の旗手と名乗りながら、フラッパーと言われる奔放な女性を礼賛する風潮を売り込んできたにもかかわらず、「新しい女性」に対して批判的な価値観に傾いていた。その理由として、やはり妻ゼルダの恋愛事件があると思う。

引用3で取り上げた女性ドライバー差別論で、どれだけ多くの死者や、障害者が女性の運転によって起きているかは、統計を取ればよいという意見に作家が賛同したのではないかと思うが、デイジーがギャツビーの自慢の「黄色いロールスロイス」を運転して、夫の愛人でガソリンスタンド兼自動車修理業の妻マートル (Myrtle) を轢き逃げするという事故を起こす筋書きにした。マートルとトムはマンハッタンのアパートで密会するだけでなく、公然と客を呼んで隠れ家でパーティを開き、ニックも同席した。ニックがデイジーのいとこであるので、挨拶のために訪問したときも、マートルからの電話が会食中にあり、デイジーもその存在を知っていたと思われる。マートルという敵をデイジーが轢き殺し、復讐したことになった。

しかしデイジーが車を運転する場面は2回のみで、初めてニックの小さな借家を訪問する場面と、もう一回は、事故を起こすときである。これは一般に家庭婦人の場合、大抵、夫や家族

の男性が運転するのに同乗することが多く、単独で外出する場合だけ運転したと思われる。そういう意味では運転の頻度も低く、事故を起こす原因になったかも知れない。ではなぜギャツビーと二人で乗るロールスロイスの運転をデイジーがしたのだろうか。理由として挙げられるのは、彼女は、人目につく「黄色のロールスロイス」に虚栄心を刺激されて運転した。(普通のロールスロイスの色は‘Silver Ghost’という車種で銀色であった。)

事故の起きた日、ギャツビーはニックを伴いデイジーを取り戻すためにトムとマンハッタンのホテルで対決した。耐えられなくなったデイジーは帰宅したいと飛び出す。彼女は自分で神経が参っているので、運転が精神安定に効くと言ってロールスロイスを運転したと、ギャツビーは言う。往路でその車を運転したのは、トムでマートルのガソリンスタンドに立ち寄っていた。もう一つ目立つことは、事故車をデイジーが運転している場面は全く登場しないことである。事故を目撃したウイルソンの隣人ミカエリス (Michaelis) によって車の動きが語られるのみである。彼は二階に監禁されていたマートルが夫に罵声を浴びせて、外に手を振りながら飛び出すのを見た。そして事故は起き、事故車は止まらず、一瞬ためらい遁走した。

“Beat me!” he heard her cry. “Throw me down and beat me, you dirty little coward!”

A moment later she rushed into the dusk, waving her hands and shouting; before he could move from his door the business was over.

The “death car,” as the newspapers called it, didn’t stop; it came out of the gathering darkness, wavered tragically for a moment and then disappeared around the next bend. Michaelis wasn’t even sure of its color—he told the first policeman that it was light green. The other car, the one going toward New York, came to rest a hundred yards beyond, and its driver hurried back to where Myrtle Wilson, her life violently extinguished, knelt in the road and mingled her thick, dark blood with the dust. (107)

運転者を特定するような描写はなく、読者はギャツビーが運転していたと推測しがちである。そうでないとわかるのは、その夜ブキャナン邸の庭で不寝番をするギャツビーに、ニックが尋ねた結果である。それはギャツビーとニックの対話から明らかになる。

“How the devil did it happen?”

“Well, I tried to swing the wheel—” He broke off, and suddenly I guessed at the truth.

“Was Daisy driving?”

“Yes,” he said after a moment, “but of course I’ll say I was. You see, when we left New York she was very nervous and she thought it would steady her to drive—and this woman rushed out at us just as we were passing a car coming the other way. It all happened in a minute but it seemed to me that she wanted to speak to us, thought we were somebody she knew. Well, first Daisy turned away from the woman toward the other car, and then she lost her nerve and turned back. The second my hand

reached the wheel I felt the shock—it must have killed her instantly. ”

“It ripped her open—”

“Don’t tell me, old sport.” He winced. “Anyhow—Daisy stepped on it. I tried to make her stop but she couldn’t so I pulled on the emergency brake. Then she fell over into my lap and I drove on.”
(112-113)

この事故の場面でいったんデイジーはマートルを避けて、対向車の方へ向かおうとしたが、おじけづいてバックして衝突したとギャツビーは述べる。このときデイジーは、往路でギャツビーの「黄色のロールスロイス」をトムが運転していたことを思い出し、この女性がだれかわかりバックした疑いがある。そして轢き車をギャツビーが停車させようとしたのに、彼女は止められなかった。(ブレーキを踏みたくなかった。)それで彼が非常ブレーキを引き止めた。このハンドルさばきには殺意があったと思われる。無論対向車が接近していたならば、衝突した可能性もあった。通過する対向車がいたという、ギャツビーの見解は事故の弁解である。しかしミカエリスの発言から、対向車は100ヤード先の地点で停車し、運転手が戻ったとあるから、これを信ずれば衝突の可能性はある。だが二台の車の距離も道幅も不明であるので、可能性の有無を断定することはできない。まずは自分の安全を優先したとすれば、デイジーを非難できないかも知れない。しかし同乗していたギャツビーがあわてて対向車の方にハンドルを切ったときには遅かったというのを重んじれば、まだ対向車と衝突する危険性は少なかったと思われる。一瞬の判断で起きたこの事故には、正妻が愛人を轢き殺すという殺人の側面があるのは、確かである。また事故の瞬間の生々しい衝撃や、運転者の心理もリアルに述べられている。

デイジーはギャツビーの憧れの女性であり、その美しい容貌、独特のつぶやくような話し方で、相手を接近させるわざを使い、男性を「手玉にとる」淑女であるが、反面非常に強い意志もあり、かねて敵意を抱いていた相手に、復讐したのであった。ニックから被害者の身元を聞いて、それに気づいたギャツビーは、理想と現実の落差に失望したと思われる。それがニックの「逃げろ」という忠告を受け入れず、デイジーの訪問を自宅で待つという行動をとらせた。ホテルでトムによって、密造酒販売をする暗黒街の人間であると暴露され、デイジーが彼を選ぶことはもはやないと知りながら、まだ未練を捨てられなかった。

ここでデイジーの運転について、神経が参っているので運転したいという理屈は、たとえ口実であっても、危険極まりない話である。これは引用3の「女性の気質が、運転の障害になる」という女性の情緒面の問題指摘に適合する例である。だが最初飛び出してきたマートルを避けようとしたが、そうしない方を選んだ彼女は、意外に冷静で、ギャツビーはおじけづいたというが、そうではない。デイジーは、偶然の機会も逃さない恐るべき女性である。自宅にまで電話してくるマートルに対して抱いていた敵意を、瞬時に爆発させた。このデイジーのモデルがゼルダであると考え、神経を安定させるために車を運転するという理屈を、彼女が言ったのかも知れない。またこのデイジーの恐るべき素顔は、ゼルダの恋愛事件以後、フィッツジェラルドが妻に対して抱いた不信感の反映であると思う。

3 事故に対する警察の対応

この交通事故の描写で、警察は何をしていたのかという疑問が浮かぶ。事故現場に警官は赴き轢き逃げ犯の車を、目撃者のミカエリスから聞きだし捜査している。現場に現れたトムにも疑いの目を向け、彼は青いクーペで事故後に来たと言い、後続車によって確認され、疑いは晴れる。警察官は、ウィルソンがトムを見たときの狼狽ぶりから、疑いを抱いたのであった。その捜査の勘は鋭い。しかし直ぐに警察がギャツビー邸に赴き、事故車を調べるようなことはない。「黄色のロールスロイス」という数の限られた車であるにも関わらずである。この伏線は、ニックを乗せて、ギャツビーが「黄色のロールスロイス」を運転して、彼のボスのウルフシャイム（Wolfsheim）と昼食をとるために、ニューヨーク市内を走行中、警察の白バイに停止させられるが、ギャツビーがカードを見せると、警官は会釈して去ったという出来事である。これを知ってニックは驚く。すると監督官に恩を売ったので、毎年クリスマスカードがくるからだと、ギャツビーは言う。彼らの密造酒製造販売は、警察幹部と癒着して行なわれていることが暗示される。それゆえ、轢き逃げ事件があっても捜査対象にならなかったと推測される。

…I heard the familiar “jug-jug-*spat* !” of a motor cycle, and a frantic policeman road alongside.

“All right, old sport,” called Gatsby. We slowed down. Taking a white card from his wallet he waved it before the man’s eyes.

“Right you are,” agreed the policeman, tipping his cap. “Know you next time, Mr. Gatsby. Excuse me !”

“What was that?” I inquired. “The picture of Oxford?”

“I was able to do the commissioner a favor once, and he sends me a Christmas card every year.” (54)

このような特別待遇が、逆にギャツビーを無防備なまま、トムの差し金で来たマートルの夫ウィルソンに射殺させるのにつながった。ギャツビーのボスのウルフシャイムが、ニックに対して、臼歯で作ったカフスボタンを示して、オールド メトロポール（Old Metropole）事件について語る〈実在のギャング、ハーマン ローゼンタール（Herman Rosenthal）が1912年にオールド・メトロポールというホテルの前で、早朝警官とギャングの癒着を、新聞記者に話した後射殺され、ギャング4名とニューヨーク市警のチャールズ ベッカー（Charles Becker）が電気椅子に送られた事件〉箇所にも、ギャツビーに警察の捜査が及び腰になった理由が、示されている。⁷

このような実在の事件に言及することは、暗黒街のボスのウルフシャイムが、1919年のワールド・シリーズの「ブラック ソックス」(Black Sox) 八百長試合を仕組んだ男とギャツビーによって紹介されることにも出ている。これはユダヤ系の賭博師アーノルド ロスステイン（Arnold Rothstein）(1883-1928) が、ホワイト ソックス（White Sox）の選手を買収したと言われたが、無罪になった事件である。⁸

『グレート・ギャツビー』が1925年に2万2千部しか売れず、作者を落胆させたが、その原因

の一つは、ギャツビーの特別扱い、警察と暗黒街の癒着を示唆する小説の展開が、勧善懲悪を好む、一般読者に受け入れられなかったこともあると思う。それは1925年12月に出た、ドライサー（Dreiser）の傑作『アメリカの悲劇』（*An American Tragedy*）が、ベストセラーの仲間入りのと、対照的である。この作品が、1906年3月に死刑になったチェスター ジレット（Chester Gillette）（1884-1906）をモデルにした法廷における検察、弁護の闘争を最大の見せ場にした作品であることを考えると、暗黒街と警察との癒着を暗示する『グレート・ギャツビー』が傑作であるにも関わらず、同時代人には売れなかったのは納得できる。しかし癒着の暴露、タブーへの挑戦はこの小説の特異な点である。

『グレート・ギャツビー』の自動車事故は、単なる偶然の重なって起きた側面もあるが、デイジーが、夫の愛人マートルを轢き殺した事実は重大である。ジョーダンが、「相手が避けてくれることを期待する」という発言は、デイジーがハンドルを対抗車の方へ切れば、避けられたかも知れないところで、事故を起こしたことの伏線となっている。ここでの一瞬の判断が、おじけづいて対向車の方へ向かわなかったのか、相手をマートルと知ってバックしたのかは、同乗していたギャツビーと路上で目撃したミカエリスの発言だけで、本人の言い分を聞かないのでは、不十分で断定できない。だがマートルを轢いた後もブレーキを踏まなかった彼女の対応には、故意が読み取れる。また非常ブレーキを引かれた後は、男性の膝に倒れこんで逃走を任せた点でも、一人前とは言いがたく、女性ドライバーは、まだ資質、責任感で問題があると言える。しかし目撃者でもあるギャツビーは、逆上したウイilsonがトムの悪意を悟れず、彼を射殺した結果、この事故の真相も闇に葬られた。このような恐ろしい展開の発端となる自動車事故を、「走る凶器」となる自動車として十分に活用しているのが、『グレート・ギャツビー』の新しい点である。

本稿の一部は2008年1月6日羽曳野市民大学で「1920年代アメリカ小説に登場した自動車—『偉大なギャツビー』の場合」と題して講義したものである。

注：

テキスト：F. Scott Fitzgerald, *The Great Gatsby*, *The Cambridge Edition of the Works of F. Scott Fitzgerald* (New York: Cambridge U.P. c1925) ed. by Matthew J. Bruccoli repn. 1991

1. Alan Billon, "Introduction," *America in the 1920s*, V. I (Mountfield: Helm Information, 2004) ed. by Alan Billon. 4
2. "Every time a woman learns to drive—and thousands do every year—it is a threat at yesterday's order of things," wrote Ray W. Sherman in 1927 issue of *Motor*. [Deborah Clarke, *Driving Women* (Baltimore: Johns Hopkins U.P. 2007) 10.]
3. Deborah Clarke 14.
4. *Literary Digest*は、20世紀初頭アメリカの有力な総合雑誌で、Funk and Wagnalls社が出した。1890年に

創刊し1938年に*Time Magazine*に合併された。大統領選挙の世論調査を得意とした。

5. “Thus, Ford simultaneously offers to free women from the house and to cement their womanly identity.” (Deborah Clarke 15.)
6. “Driving home, she and Scott turned on to a trestle instead of following the road and fell asleep when their car installed. They might have been hit by the morning trolley as it sped down to Nice had not a peasant seen them there and carried them to safety. The same obliging peasant hooked his oxen to the car and rescued that too.” [Andrew Turnbull, *Scott Fitzgerald* (Isle of Man: Vintage, c1962)reprn.2004 165.]
7. 拙稿 赤松恵子「*The Great Gatsby* における暗黒街—1920年代の危うさ」四天王寺国際仏教大学紀要 第37号 (大阪：四天王寺国際仏教大学、2003) 131-132. を参照
8. 赤松恵子 131-132.を参照

On the Car Accident in *The Great Gatsby*

Keiko AKAMATSU

(平成20年3月31日受理 最終原稿平成20年5月20日受理)

Abstract: “The yellow Rolls-Royce,” Gatsby’s pride, ran over and killed Myrtle, Tom’s lover, and ran away on its way back from a hotel at Manhattan where Gatsby had confronted Tom over Daisy. On its way to New York Tom drove the same car, stopping at Myrtle’s gas station. At first it was not certain who was responsible for the accident, but later that night Gatsby told Nick that it was Daisy who was driving. According to Gatsby’s explanation of the accident, there is some doubt that Daisy chose to kill Myrtle on purpose, realizing who the rushing woman was: If she had properly turned the wheel to an oncoming car, the accident might have been avoided. Dealing with the accident caused by a woman driver is an originality of this novel. With the rapid increase of women drivers in the 1920s, an influential magazine did a feature on “the problems of female drivers” in 1924. This trend against women drivers might have influenced the writer whose wife also was able to drive. The police’s investigation of the accident did not reach Gatsby, because there was a close relationship between the police and the gang to which he belonged. This revelation shows another peculiarity of the novel.

keywords: women drivers, car accident, gang, Ford Motor Company, 1920s